

# ミステリ読書案内

2020. 9. 14 発行元

第143号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 植物ミステリあれこれ特集

少し前の138号の『獣けもの』で、一応、「動物ミステリ」シリーズに区切りをつけたつもりになったが、「『植物』はどうなのだ？」と聞かれそうなのが、今回は「植物ミステリ」を特集してみることにした。

### 海外ミステリでは少ないかな？

海外のミステリで調べてみると、思ったほど「植物」は登場してこない。ネロ・ウルフが「蘭」の栽培に情熱を傾けているというような具体例は少ない気がする。欧米の名探偵はあまり「植物」は眼中にないようだ。ニコチンとか、トリカブトのような毒物を除いては…。

読書リスト上で題名を拾ってみると、『ポケットにライ麦を』『メッキした百合』『草は緑ではない』『レモンは嘘をつかない』『ミス・ブランデッシュの蘭』などが挙げられる。(それぞれ、誰が書いたか作者名を答えよ!) 外国ミステリでは、「植物」はミステリを構成する重要な要素に入れてもらえなかったようだ。

### 日本ミステリでは作家により…

日本ミステリになると「植物」の登場回数はずっと増える。山村美紗は「植物・花」が多い作家である。『胡蝶蘭殺人事件』とか、代表作の『花の棺』をはじめとして、『京都花の艶殺人事件』『花の寺殺人事件』『向日葵は死のメッセージ』などたくさんある。

連城三紀彦も「花」のイメージの強い作家で、『宵待草夜情』だけでなく、『夕萩心中』などの講談社刊恋愛ミステリシリーズも印象深い。日本の自然の風物を物語の中に取り入れていくのが上手だ。

斎藤栄にも『殺人花回廊』『冬虫夏草の惨劇』『ランタンキュラスの微笑』などと植物をテーマにしたものがある。

植物や花、自然に目が向いて積極的に取り入れる作家と、目が向かない作家とがいるようである。

### やはり「花」が中心に

現在の地球の植物の多くは「被子植物」で、「花」を中心にした生殖の形態を取っている。「風媒」のものもあるが、「昆虫」を花粉運びの対象にした「虫媒」も多い。「花」は目を引き付けるように工夫されているので、物語に取り上げられる植物の部位の中では、圧倒的に多いのも当然。

小泉喜美子の『月下の蘭』の表紙も、花の豪華さが目を引く。多島斗志之の『黒百合』を挙げたが、死のイメージと結びつくためか、「黒」の花もよく取り上げられる。藤雪夫

・桂子の『黒水仙』などもその例だと思う。

花が咲いた後には種子ができる。内田康夫の『悪魔の種子』は、品種改良にかかわる事件を取り上げた力作である。

### 最新の「京都西陣なごみ植物店」

最後に、最新の植物探偵の紹介。仲町六絵の『京都西陣なごみ植物店』シリーズ(PHP文芸文庫)。現在3冊出ている。日常の謎系列の作品。姉の植物店の仕事を手伝いながら持ち込まれてくる植物がらみの事件や謎を解く若い女(植物)探偵が主人公。「ミステリ」としての作りというよりは、「キャラクター小説」の特徴が色濃いので、謎解きの方あまり期待しないで、ほっこりする話だなあと読んで読むとよい。シリーズを書き進むにつれて、だいぶ物語作りが上手になって、読みやすくなった。

田舎でも、都会でも身の回りにたくさん植物があるけれども、雑草の仲間ほとんど見向きもされない。私が中学校で理科の授業をしても、タンポポ以外は通じなくなってきている。子どもたちに、もう少し自然に興味を持ってほしいと願うのだが…。植物は、世界を形作る大切な要素のひとつ。

そして、更に最後に、余計な話をひとつ。「そうそう、植物の名前のついた検事がいるよ」「えっ、誰のこと?」「赤かぶ検事!」

**果物・木の実ミステリ?** ……上記の「植物」は「花」が中心になったが、「果物」や「木の実」なんかはどうだろうと思って調べてみた。EQの『チャイナ橙の謎』に登場する「タンジール蜜柑」。謎解きの大切なポイント。タッカー・コウの『蠟のりんご』。ミッチ・ドビン・シリーズの第3作。「りんご」は…。ハヤカワ・ミステリ文庫のイギリス・ミステリ傑作選の中に入っている『木苺狩り』はJ・R・L・アンダーソンの作。

和久峻三には植物が非常に多い。果物で言うと『信州あんずの里殺人事件』『京都奥嵯峨柚子の里殺人事件』など。植物に範囲を広げると『京都紅葉街道』『京都大原花散里』『あじさい古都の寺』『日本三大水仙郷』『北嵯峨竹林』『ひまわり時計』『吉野山千本桜』(『殺人事件』など省略)…とずらりと並ぶ。さすがに風景写真を撮り慣れている和久の視点だなあとと思う。トラベルミステリ関係では、有名な観光地は取り上げられやすい。

「木の実」。パトリシア・モイーズに『ココナツ殺人』がある。と書いてから…「コーヒーの実は?」などと思うと、飲み物のコーヒーなんて、たいていの本に1回は登場するなあと思ったりもする。